慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『大越史記捷録総序』注解I
Sub Title	Commentary on the ĐẠI VIỆT SỬ KÝ TIỆP LỤC TỔNG TỰ I
Author	嶋尾, 稔(Shimao, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.233- 240
JaLC DOI	10.14991/005.00000051-0233
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0233

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『大越史記捷録総序』注解 I

嶋　尾　　稔

前号の導入［嶋尾 2019］を受けて、今号より『大越史記捷録総序』の漢喃テクスト[1]について注解を施してゆく。本稿ではベトナムの境域と中国の境域の本源的区別の観念について述べた冒頭部分を考察していきたい。まず、漢文正文を意味的連関に従って区切り順に番号（h001～）を振って提示し、続いて、区切られた漢文の中に付された字喃表記のベトナム語割註を示し（n001～）、そのクオックグー（声調付ローマ字）による音写（q001～）と和訳（nh001～）を付す。漢文正文中に割注の置かれた位置は【】で指示する。字喃についてはフォントの都合で字形を変えた個所もある。これらのテクストの記述内容に関して漢文正文と字喃割注を併せて解釈し考察を加えることにする（cg001～）。

1　漢文正文

h001　乾坤定位、離坎殊方、分限在天書、軫翼焇其斗宿【】

h002　啓封稱樂國、瀘傘奠厥山河【】

h003　拒巴蜀通兩廣、跨大海撫烏哩【】、東西萬里有餘

h004　自炎軒歴三代至宋元及大清【】、南北兩君並帝

2　字喃割注とその音写及び和訳

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 51 号（2020）pp.233~240

n001　冊天書𨱗軫𨱗翼屬衛分野渃南

n002　瀘羅瀧珥河、傘羅肉傘圓

n003　陂𡑞渃南邊西典巴蜀、邊北夾廣西、邊東北夾廣東、邊東典滂、邊南典烏哩、詹羅廣南順化

n004　炎羅希炎帝、軒羅希軒轅、三代羅𦍒夏𦍒商𦍒周、典茹宋茹元、及茹清、詹羅希嘉慶

q001　sách thiên thư sao chẩn sao dực thuộc về phân dã nước nam

q002　lô là sông nhĩ hà tản là núi tản viên

q003　bờ cõi nước nam bên tây đến ba thục bên bắc giáp quảng tây bên đông bắc giáp quảng đông bên đông đến biển bên nam　đến ô lí nay là quảng nam thuận hóa

q004　viêm là vua viêm đế hiên là vua hiên viên tam đại là đời hạ đời thương đời chu đến nhà tống nhà nguyên cập nhà thanh nay là vua gia khánh

nh001　天書には軫星と翼星が南国の分野に属しているとある。

nh002　瀘とは珥河（現在のホン川sông Hồng、紅河ともいう）のことであり、傘とは傘円山（バヴィ山núi Ba Vì）のことである。

nh003　南国の境域の西は巴蜀に至り、北は広西に接し、東北は広東に接し、東は海に至り、南は烏・哩二州すなわち現在の広南・順化に至る。

nh004　炎は炎帝王のことであり、軒は軒轅王（黄帝）のことであり、三代は夏・商・周のことである。周代・元代を経て清代に至り、現在は嘉慶王の時代である。

3　注解

cg001　漢文正文冒頭では、まず天地（「乾坤」）が定まると同時に南北（「離坎」）の区分が出来したこと、それが「天書」に書かれていることが示される。「斗宿」は天文二十八宿の北方の星座のことであるが、字喃注を参照すると

ここでは南方の意味で使われているようである。斗宿の別名が南斗であり、南斗という語には南方を表す用法があることから転用されたものであろう。

ここに「天書」とあるのは、宋の侵略に対してベトナム側の勝利を予言する神のお告げが下ったという伝承の中に出てくるものである。この伝承は15世紀に成立しその後増補が続けられた正史である『大越史記全書』（正和18年〈1697〉序）の注にも載せられている［陳 1984: 248-249］。『同』本紀巻3太寧5年（1076）条には、宋の侵攻に対して李朝仁宗が李常傑に反撃を命じ、李常傑が如月江で宋軍を大破したという記事がある。この記事の注に記された伝承では、李常傑が如月江に駐屯している際に、ある夜如月江河口の張将軍祠で兵士が次のような大音声の神のお告げを聞いたとされる。

南国山河南帝居
截然分定在天書
如何逆虜来侵犯
汝等行看取敗虚

南国の山河は南帝の居所だと天の書にはっきりと書いてある、どんな非道な敵が侵略して来ようと奴らは敗者となろう、お前たちはその壊滅の様を見に行くことになろう[ii]という神のお告げのとおり、宋軍は大敗したと語られる。この伝承は14世紀の『粤甸幽霊集録』にすでに見える話が正史にも採録されたものである。『粤甸幽霊集録』は黎朝期に何度か改定増補が行われている。各ヴァージョンの中に記載されたこの詩を序・跋の古い順に列挙してその異同を検討する（すべて写本で伝わるが、筆写の年次は不詳である）。

南国山河南帝居
截然<u>定分</u>在天書
如何逆虜来侵犯
汝<u>輩</u>行看取敗虚
『粤甸幽霊集録』（開佑元年〈1329〉李濟川序、阮文賢（質）〈15世記〉

増補）
「却敵威敵二大王」［陳 1992a: 30］

南国山河南帝居
截然分定在天書
如何逆虜来侵犯
汝等行看取敗虚
『越甸幽靈集録全編』（永盛8年〈1712〉黎純甫跋、呉甲豆〈1853- ？〉重補）
「却敵善佑助順大王／威敵勇敢顕勝大王」［陳 1992a: 194-196］

南北封疆各別居
星分軫翼在天書
鯨呑狼噬眞無厭
會見塵清掃（歸か）太虚
『新訂較評越甸幽靈集』（景興甲午年〈1774〉諸葛氏序）
「南平二張録」［陳 1992a: 89－91］

『粤甸幽靈集録』と『越甸幽靈集録全編』に掲載されている詩は、『大越史記全書』所載のものと同じであるとみなしてよかろう。ところが、1774年の序を持つ『新訂較評越甸幽靈集』所載のものだけが大きく異なっている。『新訂較評越甸幽靈集』については説話の内容に大きな変更を加えられていることが既に指摘されている［陳 1992a: 8-10］。宋軍撃退の神のお告げも同様の改変を蒙っているとみられ、抽象的思弁的色彩の強いものになっている。南北の境域は別々の居住空間であり、南方は軫星・翼星の分野であると天の書に記されている、鯨や狼が獲物を呑み込むような残虐な侵略はまことに執拗であるが、必ず塵は清められ本源的な世界への回帰を目の当たりにするであろう。

この新しい詩と『大越史記捷録総序』の冒頭の記述の関連性は一目瞭然で

あろう。18世紀後半北部ベトナムでは南国には南帝がいるという旧来の主張をさらに進めた南北の境域が明確に区別されるというより直截な「天書」のメッセージが出現し、少なからぬ知識人がそれに共鳴していたのではあるまいか。

cg002　南方の境域が拓かれ、楽土を形成したこと、ホン川とバヴィ山が国土の中心をなしたことが記される。

cg003　南国の原初的境域の西方は巴蜀と相対し北方・西北方は広西・広東に通じ、東には大海が広がり、南は烏哩二州すなわち順化（フエ）・広南（クワンナム）まで広がっていたとされる。東西万里とは広漠たる空想的境域に関する誇張表現であろう。ここで問題となるのは巴蜀すなわち四川盆地と相対しているという記述である。ベトナムが雲南を通り越して四川と接しているという地理観は、伝説時代の雄王が建てた文郎国の境域に関する正史の記述に由来する。

『大越史記全書』外紀巻1鴻厖氏紀では、文郎国の範囲については広狭二種の記述がなされている。文郎国はその国土が15部に分かれていたとされるが、それらは北部ベトナム内に比定される。一方、その境域の外側については、「其國東夾南海、西抵巴蜀、北至洞庭湖、南接胡孫國、即占城國。今広南是也」と記されている。四川盆地及び洞庭湖、すなわち戦国期の楚・蜀と接しているかのような表現がなされている。本テクストでは北方については、両広に接するという現実的な記述がなされているのに、西方についてのみ巴蜀に接するという伝説的な地理記述をそのまま残している。あるいは、雄王時代に先立つ伝説の王涇陽王の配偶者は洞庭湖の龍王の娘であり、雄王時代に後続する安陽王は巴蜀の人であるとされるのであるが、後者だけをより確実な「事実」と見なしてこれとの関係を重視したのかもしれない。安陽王が巴蜀の人であることについて確証はないが、『大越史記全書』に先立つ14世紀の『越史略』巻1国初沿革も安陽王が蜀の王子であると述べている（文郎国の地理的範囲は記していない）。

中国側の文献を見ると、4世紀末に成立した巴蜀の地誌である常璩『華陽國志』巻3蜀志は「其地東接於巴、南接於越、北與秦分、西奄峨嶓」とあ

る。長江下流域の越が四川盆地の南にあるというのも不可解ではあるが、このような語り口が一般に流布していたとすれば、それが14～15世紀のベトナム知識人の歴史的想像力に何らかの影響を及ぼした可能性も皆無とは言えまい（もちろん戦国期の越と大越国とは直接の関係はないのであるが）。また、この蜀志は、黄帝の子昌意が蜀山氏の女を娶り、高陽を生み、これが帝嚳となり、その支庶が蜀の侯伯となったという蜀の起源伝説を記している。『史記』五帝本紀では、黄帝の子昌意と蜀山氏の女の間に生まれた子高揚は帝顓頊となったとされる。帝嚳は、帝顓頊の兄の孫であり、帝顓頊の後を襲った。のちの蜀の支配者の系譜との関係は記されていない。しかし、帝顓頊の際に「南至于交趾」と記述されており、中国の南方関与の伝説的起源の一つを示している。このように断片的ではあるが、蜀方面とベトナム方面を関係づけるような情報が伝えられており、これらが後代のベトナムの史家に何らかのインスピレーションを与えたのかもしれない。

ベトナムがフランスの保護国となった1884年に成立した『欽定越史通鑑綱目』は『大越史記全書』の記述に厳しい批判の目を向ける歴史書であるが、文郎国の範囲についても疑義を呈している。『同』前編巻1：3b-4b謹案は、洞庭湖は湖北・湖南に接し百粤の北にあり、巴蜀は巂滇（雲南）を隔てているのであるからベトナムと接していたわけはないという歴史地理学的議論を展開している。

cg004　炎帝神農氏、黄帝軒轅氏といった神話の王から夏・商・周の聖王を経て、さらに宋、元、大清といった中華帝国の諸皇帝にいたるまで、南北の君主は両立し対等であったことが明記される。それは現在の嘉慶帝の時代まで続いている。まさに「天書」の定めた通りであるという主張である。ベトナム方面を支配していた秦漢隋唐や永楽帝が一時的にベトナムを支配した明に言及がないのはおそらく意図的なことであろう。

なぜ炎帝から語られているのか。これも『大越史記全書』外紀巻1鴻厖氏紀が確立した建国神話に基づいている。南北の両君がいずれも炎帝の子孫であるとする神話である。この神話によれば、炎帝の三世の孫帝明が五嶺に至り仙女と結婚して生んだ子が涇陽王として南方を治めることになった。帝明

は当初この子を後継者にしようとしたが、この子が固辞して兄にその位を譲ったので、兄である帝宜が北方を治めることになった。L.ケリーは、この建国神話のもとになった『嶺南摭怪列伝』(ベトナムの説話集）の一説話（巻1「鴻厖氏伝」）と『華陽國志』巻3蜀志に載る上述の蜀の系譜譚の類似性に注目する［Kelly 2012: 96-98］。確かに伝説上の中国の皇帝が地方の女性と結婚して生まれた子の末裔が国を建てるという点では似ており、後代のベトナムの史家が『華陽國志』の話からヒントを得た可能性がないとは言い切れない。しかし、蜀志における黄帝の係累の末裔が蜀を統治したという筋立ては蜀が黄帝の子孫の一派であるという意味で中国史の枠組みの中に包摂されるものにすぎないが、ベトナムの場合は黄帝に先立つ炎帝に起源を求め、しかも中国皇帝との対等性を言おうとしているのであるから精神の構えがまるで違う。ベトナム知識人の精神のありようと中国の地方知識人のそれの連続性を主張しようとするケリーの見解に与することはできない。もっとも炎帝に起源を求める発想はベトナム独自のものではなく、中国の「歴史」観の変化に基づくものではないかと推測する。宋代の『資治通鑑外紀』巻1（7b［欽定四庫全書本］）神農氏条には、「其地南至交趾」とある。『史記』五帝本紀と比べると中国の南方関与の「歴史」を随分遡らせている。この「歴史」観の変化の理由を私は全く理解していないが、ベトナムの知識人が中越関係の始点を神農氏の時代に措定する際に、この記述が念頭にあったことは十分考えられよう［嶋尾 2017: 280］。

字喃割注では、中国の君主について、「希炎帝」、「希軒轅」、「希嘉慶」という表現が用いられている。「希vua」とはベトナム語で王を意味する言葉であり、ベトナムの皇帝に対しても使われる。南北の君主は、ともに「希vua」であり、その敬称においても対等の扱いがなされていることが知られる。

注

i　漢字漢文のテクストと字喃表記ベトナム語のテクストを併せてこう呼ぶ。

ii　『嶺南摭怪列傳』（洪徳23年〈1492〉武瓊序）「龍眼如月二神伝」ではこの伝承は

違った形で残されている［陳 1992b: 74-76］。宋軍の侵略に対する勝利の予言という点では同じなのであるが、李朝時代の侵攻ではなく、李朝成立以前の黎桓（黎大行）の時代、天福2年（981）の最初の宋軍撃退のときのこととされる。黎大行は夢で神のご加護の託宣を聞き、また戦争に先立ち二神が戦場に向かう姿を夢に見たが、その夢のとおり暴風雨の戦場に神が現れて大声で上述の詩を吟じそれを聞いた宋兵は壊走したと述べられている。この文脈では神の詩を聞いたのは宋兵ということになるので、「汝等行看取敗虚」の句の落ち着きが悪くなっている。「お前たち宋兵は惨めな敗北を目の当たりにするだろう」という訳では無理があるように思える。ベトナム兵向けの神のお告げを聞いて宋兵が驚いて逃げたという解釈も可能であろうが、やや違和感は残る。

文献

Kelly, L.C. 2012. “The Biography of the Hồng Bàng Clan as a Medieval Vietnamese Invented Tradition.” *Journal of Vietnamese Studies* 7-2.

嶋尾稔. 2017.「ベトナムにおける通史的歴史認識の研究のためのノート」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』48.

嶋尾稔. 2019.「『大越史記捷録総序』注解：導入」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50.

陳慶浩・鄭阿財・陳義主編. 1992a.『越南漢文小説叢刊　第二輯　神話伝説類　粤甸幽霊集録・新訂較評越甸幽霊集・越甸幽霊集録全編・越甸幽霊簡本』台北：台湾学生書局.

陳慶浩・鄭阿財・陳義主編. 1992b.『越南漢文小説叢刊　第二輯　神話伝説類　嶺南摭怪列傳・嶺南摭怪列伝巻三続編・嶺南摭怪外傳・天南雲籙』台北：台湾学生書局.

陳荊和. 1984.『校合本　大越史記全書　（上）』東京：東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター.